金蘭集

金葉集にかゝれたる万葉
の歌に
かきほなる
中々蕉翁の俳諧百余年
あるなれば
国の法は一変う
案じ得て所位中の定れ
ぬうれて越の耳井に
さはく二子梓行の志あり
かれ孫を其事を遂すて
久しく世をうて埋もれるをうけ
を南無蕉翁あり作をと

なして好事の集を作る所
句々をも拾ひあつめたる也
冥のあやまりをもかくし
事業のうるはしをあらはしを千
年に残さんとおもひ
かくはかりにてもみちの
あてなひうるあるを
文化丙寅春

みちのく南部

北溟識

凡例

一編次ハ大原の序を考へ又
年月を追ひつゝ
考へ合せ風調を
一異本多くを遠ふる其侭
天本とせる
本書多くなるに付て本書の
侭に記す
巻の目録又ハ其時乃作成ののう
多を冥し多くを
甚多くは化号
むしろ杉景の俳名なる
○城下の逸なる
後人俳事を記しるす
一桃青芭蕉翁と記しるすは
本乃原のくおのつゝ其時代を
ひらぬ勉し
一本書のみならず世にある種々人乃
ちからさるを墨をおもくて八餐

句吟ぶりくはしくきくハ世にあるへし
ミな信ずるに足らし然ど
一 歌仙ハ脇まで芭蕉翁の句なるは
一巻を写しておき次
一 附句并集りおほく又ハ此伝し
然ハ其作に依て
一 松しまの独吟歌仙ハ奥州大石田と
いふ所にありて須加川の等躬が撰
晋流と云者懐うちなく京都にある
とく隠家やめてぬるを新の葉乃
巻とさだめ梓行せし新の葉ハ芭
蕉しの奥州まで須か川の円成寺
の等躬より譲りて梓行すると一説
きり隠居墨消の袖にて翁の自
筆なる陣隣にしかれ松島独
吟ハ此ほとう成風調に侍る由
梓行乃年ハかくのことくなし
一 吾妻江津の歌仙甚晰にハ云伝を
ミつ物そう翁乃真跡にて今

平の秘蔵なり菜様の発句ども
脇平にして分かる吉蹟あり
四句目よりハ爾しこ形ハ草前の
反古乃中より見出されよし
一 此さらに川まで長なる表にもと
歌仙ハ秋風の集にて信徳が許せる
状其作を写しおく　嵐雪続猿蓑
すは難るし長にあらしこそとて
里圃が句立こそ撰集の時に里圃が
句となしたる事も翁の取せる
人も古代の先うもれと云句ハ奥州
言久しく翁乃句なり此を花良
也翁とし下しおくるもなり加る　許文
撰集の附再集を見るべし

三ツ物
発句あり　え　ち　桃青　花の雲
歌仙
鳥羽ちるやあらし　此　桜あさ
表六句
芭見ふとされ未おとし　柳原
歌仙
まくやさくさとやまさ芭の露

風色やたゝるる庭しる庭の秋

墨跡 墨跡く行の本初ゑ表れし

無きく八ゝきくもきと見ゆるとゝ

ゆくく所くゝ俄雨のあるてあるほるゝし

好るの人行ゝくち恨補しゝ

院芳井　耳井




日乃春残　右百韻

旅人と家名あつさや

右五十韻

月新ゝ　志ゝるしゝ

芳ようき世　松風ゝ

附芳ゝ

麝香

月の

詩あきんと

風彼口ゝ

時八あ先

冬京や

星岸や

裏月や

ほゝえゝて

京まて八

竹の本乃

ほくくと

初あきて

何とハなしふ

秣負ゝ

炭賣乃

初雪乃ちゝ

海苔ゝ

栗稈ゝ

ゝ

ゝあつけて

葬の

風流は
松のむ
ゑてしや
きうくやや
ちうりく
茶碗て
紫陽を
衣裳して
かきうふの
うまれりた
市中ハ
鳥のねも
月又ちる
外かふや
洗足て
色くれ
久方や
末日て

右 千仙

貞享三年丙寅正月　其角

日の春とさしかふ霞の袖
柳てちきる家々の相ひ寅　文鱗
雪村の柳ちる初より揮さして　枳風
酒屋の慌にへ遣の月　コ秋
秋の山寒ひ雪の名雲ん　芳重
炭竈と祝くく冬のこう　杉風
里くれ麦不のうなるむこう　仙化
新茶弱よ面おほひきよ　李下
朝すきさ三笠を洗乃ハ　峯白
氣仏て粉の俗ハくく　朱絃
酒やくく連家の器ちん　蚊足
敵家を春る　松乃夢　チリ
有明の梨打鳥帽子ちう　邑蕉
字世乃春を宴のておそん　華
悔ま一番の木槿乃義ちよ　鮎
後伯女寿ぬさ打くく　角
山陰く乳を春雅の色ま一　秋
命を甲斐乃代ちてよ　枳

法の山永利繁を理を亜む
そつ〻の記を川の外の戸
さく月う車かそゆる也の陰
はしそ小西ともゆるかあろ
ゆる雪殘る東山の路〻〻
醉うふ醉〻〻蝶とる家
屋吉うは〻さうつる釣あけ
を夢あ眉を陰を衣く
罌子咲く情よ不西ある宿ろ
蕎分乃風イこよ矣巽切よ入
加乃そ下ゆ世を下る狐いる
あれ自然の墨しかつき
万乃戸極熟る世はよ位像く
我こ代乃力井飛治
彫孫ハ金を〻〻松の
迦仁の四柱西陰ろ〻ん
疾窓〻よ落まん本そ
船よ菓北湯乃浦意ろう
祝繁まて人の煩とめ連て

枳 意 化 秋 罌 白 角 翔 法 化 下 角 里 法



孤勒乃堂ふおりひ井邪
待育の陰ハ墮る草此中
女よよ蟾乃あうきの義乃
西ま人そいや〻を〻る鄙墨
門を魚乃を破除乃寺
理不を物ふ武志六七詩
あ〻堂〻牧乃沛戸撰を
勝也多夕日と月よ改めて
孔乃館屋秋寒ふなう
稲畫乃本此百を色のぐを
つを作き〻〻堂〻家前
人あまさ年ふ物とうな月楊
海を堂撰の金山の泊
此ふの武仙と為る惠りかを
東う級まる硬弁のう
玉川やおの〻六の所ふく
江湖〻よ〻意よ
雨の色此苔精ふ読る氣
作〻と〻を蓋〻海

枳 意 化 秋 罌 白 角 翔 法 化 下 角 里 法

南むく菊屋の細乃書貼て
釈と墓をうの川 ふのつもく
候很るなしの麦藷を打金毛
贅ろう買ろ秋のうろろ
麻乃芳を無いたもつめ
むくき男乃新生堂 月
笘乃西 狩七里をぬ長ん
伊勢河四の麦れ川つ
め車毛つく芳ふ
毒ハちろ毛の院く 球宇
二月の菫菜くもすきめたや
婦 徐 牛乃おそき日の新
自あハぬ誠乃縮を織毛
おもひあつ毛 菅れ州さ
菱の禁ふを志ろ志て 絡ル
耳魚ゆ 好る山陰耳 も
固をやろく休むる釣の月
義さ ろと 長ろ法きあ
耳 附 霧と 兎ま 笘ハ 蒸く

不一 鏡 松 煮 弦 ト 下 水 角 千春 秋 里 蒸 凡 鏡 下 秋 ト 春

ふなろ ふ ろ 安ハ 塔のろ
三度ふむ 百 の 橋 左 浮 山
あろ ハ 志ろ 草 の 歌 毛 盆
傾 塔 を 志 き ぬ き の ろ と し
待 ろ く 智 ふ 麦 れ ろ 川 イ
弁 海 き 無 ま 形 る 加 る く
梅 す く 若 く き 匂 ひ な ろ ろ
む 南 よ 石 乃 竹 ふ 麦 消 え 麦
地 と る 歌 の 仲 も 志 川 ろ ろ
伊勢を幸る月よ釣月れ西 鏡き
擇 ろ む ろ く 橋 法 る あ き
伝 書 乃 法 毛 る 世 や ま ゆ ら ん
原 上 と よ え 新 く 加 ふ の 咒
あ よ 牡 母 千 里 れ 香 と 久 く
き ま む 岩 る ま る 湯 を き く
岩 根 ふ く 書 き 地 勢 を 嶺 を て
ワ く や こ 弁 乃 ふ 保 れ
毛 ぬ 志 ろ ま き や つ 逸 ふ く く
爰 法 を ち ま れ 青 ハ 法 る

法 化 下 鏡 里 峡 山 化 ト 下 鏡 角 秋 化 ハ ト 里

足川の庄山よりいでさせ　沙角
千年をへなる歌者の住名　風山
あいの川帰さなる乃川作ひ　卜白
をなをなをよしる雲北白鷺
庵庭乃七夕まるよ数る花白
連歌くり乃歌をそ久しな

十月十一日俳別会　芭蕉

旅人を家名ゆたかに初時雨
ホさん笠を宿くみて　由之
鶺鴒乃ひほと無の為代しまよ　共角
雅をかるる山法井露　枳風
うけはるく芝生の家代海流　文鈴
新し蓮華蕾月まいそや　仙化
中乃秋画工一つ埋るなり　奠児
新てくしそ初る薄　舟観水
非垣や巧者よいくき波の雲　全峰
鈴と成しかの天う乃雲　嵐雪
酒のそよ軍乙如意の蓮長く　執筆
印月乃雪と掃るつくを称　蕉之
鍋つる袖つくはう軍陣川　角風
蘿一面りのこる橋杭　鈴化
をきくぬ星よ船をうまり　涛
月出や帰うん海流の童人
菅竜庵く自ひと孤ちうく
おとと男事を祝ひ偶偶

遠平みゑる車の篷を葵て　為之
沖こく舟よ名さ乃ゝ八雄て　雪
能ゆ人よ名の付く波を時ゝ　白
別ゝ屋と　四て　琴のを　峯白
咋の峯ゝ　ゝ　浮世の如へ　ゆ
萱代ぬまめ乃雪と　鶴く家　化
光の月乃縄ゝ　ゝ　ゝ　之
君流さ乃し　紙の筆ゝ　為
的芳八千浮の松と　白
命とあり人　舟よ　這ゝ　角
都ゝく　ゝ　ゝ　雪
ゝ女御ゝ　ゝ　ゝ　ゆ
葦や　石ゝ　ゝ　峰
小畑さ　き　ゝ　風
ゝの　ゝ　ゝ　為
ゝ　ゝ　ゝ　白
蕙乃　ゝ　ゝ　化
懺ゝ　ゝ　ゝ　角
以牧　て　氏乃　峰
俺ゝ　ゝ　ゝ　風
兄若　ゝ　ゝ　角
境乃　ゝ　ゝ　雪
臣家や　ゝ　ゝ　ゆ
我ゝ　ゝ　ゝ　為
谷深　ゝ　ゝ　白
ゝ　ゝ　ゝ　之

さびしさや小松吹萩薄　芭蕉
家を見知て新川生月　コセン
踊る夜淋しき秋の数ならん　わ枝
よし代あるゝと宮女夕暮　斧ト
きゝ雪やおし張あゆるもさき深　荃生
あしゝけり無ほもし鳥一羽　志格
彼ありな楓子華しり冬を捨ひ　夕市
雨ふり湖清の虱をとうし草よ　被益
香辰川松よりわくよ次八春ノ　観生
も食起しく如くをなり　竜良
榛乃打くハ空よ蒔かへき　枝
華ともむ汲やはらし夜の白　蕉
夕雨乃来飢え含りて　ト
子を蒼清も雜かし学　枝
侍の勢のつき社命なり　コ
そろ盤勢よ花湯乃母よする　記
湖まされ肉まで書の光して　格
滾るゝ粟とと費く味よ　市



鈴虫も狸乃腹やかゝくらん　益
華魚うけくはし豕高塩　生
帯より色ま彦をむもひら由　良
ぬるむ清水り洗ふ黒米　格
春霧続捲きしま人なちて　枝
うらちくち手ま嘘多ちき　市
一権ま打きくお安三日の月　蕉
秋の君おく家眉のと　コ
蕭あらし床むり袖の澈宮な　生
恋ていよセうる出くへん　ト
忘れ草心のみ乱うへおセなり　記
身さねし清雨乃枝霰　岌
阿弥陀すらも夜とらおし幸家　枝
宮後のさ白代声さ探しき　良
雪けく留代良ハ志来まなり　コ
夢さ良くの種のせとしも　記
大さハ掠ま含まつらい能く　蕉
竃よりんめら町の白雲　益
風たん敲さえて流しやれ　蕉

篇流しとても いふ世こそいふ　卜

古き無筆のふみとてもゆかしき　帘

なま弟乃情けり寄やあまたん　コ

声とりもかゝしく野分とき降し　蓋

老ぼれり笑しく霧を友　訒

うなし波の夜すさ荷ふ寄あり　良

うらうらしくやちゝきれの山　杖

暁や雪ちらすさめく藪の月　圓風

煙くと造る楮乃けさあり　梅穎

膚よむ人のきさ雨もあく屋て　半游

かゝり杜丹の名を廣めけり　土芳

献くま間ある事のよく有る　良品

扇乃角をつふも荒しく　凡麦

春に何ぞ薜絲乃鞘を挽草も　芭蕉

たに川雷けり将監か蓑　本白

馬の轡かまへこゝまはれ梅の宅　家

あこを絞ねりと古め縄のうけ　配刀

伊せの浦よこれ嘉禮を歩そゝき（イニ八くさき）　麦

敵乃首絞れくみなには　凡

村人も笑の莚てさてまで　芳

錆に門徒をなる叫けり　示

造り出し今日の酒甘呆　游

月と名はの衛宿きあし　力

蛛のりや淡に積葉の生寄り　凡

乏き事ちとしれ庭の古残菊　麦

こなしよ薬代衣裳も腰押て　荘
おしうけられ侍りの汁　芳
此花より滝をさかむき今ちる見ん　白
肩に指ぬる作の早蕨　叙
踏かる雲雀にこまかん里帰　凡
放つ衣も紙染進一もの　麦
葬礼にたゝれて高き気色　不
女嗅さる竹の戸の内　芳
後朝の妻の子は侍を酔て　荘
滑中の宿く勝らりける　念
村雨る猿の巾着侍りのき　叙
まとひくゝる猿沢の泉　刀
斉は繕ぬと燃く烏帽子師て　白
洞とふらしや猿の蝋　球
七夕り昼とかかる深眠衆　凡
家売くせとあしき有き月　蓑
柿の木は枝も多らて小ゐのとつく　麦
龍てすきもし名や　芳
修行者の猫孫八ゐる峯伝ひ　凱
小半の星は包む村雨し　念
霧の乳膝寒く吹せらん　球
松ヶ一本山の神く　凡
乞食して花小まかせる蔬菜　荘
謡子みく遊びてそいさとしまき　芳
妻見りほろく酔のおくれて　刀
四ツ屋方は山吹と摘　麦
伏しるいおと繕なかに楊枝を　不
家ぬしの来て琵琶の名字　念
川らく菖蒲の階子きは　芳
目の康吹て世に夕暮　凡
月の前志くもし良き見しき　蓑
姥らしく恋のいさかひ　刀

元禄七年九月四日　雑亭奥行　支考

松風の彩酒をすゝる歌客の
月をかゝふくゝる石垣代うく　猶雑
町のつゞるゝ庫乃花縅えゝ　芭蕉
きてしをゆゝさ乃雑と月なる　雪芝
廿日とき見てまゝゆゝうゝ川うと　惟然
世山うゝく　愛知く　藤おなる　雪芝　俳
藤の屋八切うゝ　卓袋
庶くあゝまゝと　里翠
夷藤縞乃ゝゝ　利考
嗚咽の中を　雑
仕舞と矢橋乃　芝
あゝゆと藤の　苔
ゝゝと泣みを　翠
太立屋根や乃　袋
周の五時八ゝ　苔
面乃後日代命　考
除墨を格き　芝
親とゝゝゝと　俳
考

月新まゝ西ゝ　翠
ゝゝゝゝん代　桃
咲去ゝ毎ゝ　然
頃ゝゝくつゝ　玲
牽と猟乃ゝ　俳
円俵乃茂ゝ　芝
乃頃の門乃ゝ　芝
一里代ゝゝ　考
山ハみゝ寝桝　雑
日日乃くゝゝ　翠
世方ゝゝ乃く　芝
蘭乃こゝ表茅　考
傍軍乃襲と　俳
香あゝ　然
小舎とハ白食　芝
先度の限ゝ　然
ハゝゝなゝ日ゝ　玲
曲ゝゝあゝゝ　考
粥と今ハすゝ　苔
かゝゝ　雑
雪ゝ埋ゝ　翠

うまんの茅ぶき小川たちと呑
法華をまろうこまをまつる
こはたのくまをまつる 新の女房子
鶏の茅ぶき酒屋 ゆ屋と庇の業
何も次第よ牛代敬法く
柿もも出姉とうるたるき 楠の枝
月見る竹もも造作ちうも
かるをもくくとする 秋の風
濱の小家とうるる 老方さめ
懐ろ九あ くくまとゆ状
いそぶの新よ
雪隠の高ろう 豆腐屋
相撲法ひよ雪の 嵯

蕉 考 袋 雄 芝 邨 考 窓 船 邨 考 雄 芝

詩あきんと年を貪る酒便元 甚角
夕明日寄て かる馬 雑 色蕉
弄張き春よ閑を ゆるちん
三線人乃 思を法一 、角
月小神ろろき 雪 藤の上
暗乃羽ちもも 硬ハ法き
駅ちも俳を 多の 蕉
一人山 清 傘を 棄
無行のとを 蕉小 、角
相場乃雪よ 不 角を
一代昭里の 在 蕉
新久よ角ろ 角 蕉
法ろよを 怨の 蕉
うき世よ 沢 蕉
酒ハ茶 貧 角
ちを成ろ 法 蕉
寄ろ 俳諧 角
鍋々ろ 庭 蕉

蕣の乃迚つく作よりさめさ　角
毎くひやんと昔うく昔　笠
吟ゝ芳舎　繪れ小紫　角
思翻く紙ゝおとゝ世う氣　笠
枯葉鬢栄嘴の角と出ておれん　角
麈徒と使ゝと荒海の磯　笠
繪ろれ猛き世ゝ　おゝよ　角
俳諧　妊ろあ　笠
山宅ゝ四　雖の茶と　角
うゝ少消ゝ　梅乃　笠
ろ白布朝をねさ自と安　角
西瓜をあやよ白むあやゝ　ゝ
家いよ家塚堅ろ吟潤ん　笠
みちのく代考ゝ　石句　角
武士乃羅の丸庵ゝ　笠
八幡の弱乃雷紙若ゝ　角
徒あきんと茶と舎ろ酒傷れ　ゝ
書湖白美ゝ　笠



おき墨　ゝ
苔ようき世　酒白く食ゝ
俳を　陽　代　痩　一晶
宝吟ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　花雪
帝ゝ　礫と　ゝ　ゝ　キ角
月と河と汀の蕣を　芦　花菜
作のさ作よゝなこ　句新　筆
琵琶湖の雨の　句の　晶
朝ゝ　ゝ　ゝ　紙衣　笠
辰人の　ゝ　ゝ　雪
屋　乃一　ゝ　ゝ　菜
家さ一　ゝ　ゝ　角
家ゝ退ゝ行　東と奪　呉
書香　ゝ　ゝ　笠
次て　ゝ　ゝ　雪
俳諧の陸と　ゝ　呉
初ゝ角と　ゝ　角
化一の惜と　ゝ　菜
芭蕉　語ッテ　侍の　ゝ　雪

朝霧は西瓜を睡る遠山の
つくづくもぬる日乃松浦庁橋　晶子
見つるあけやくくの萱庇　雪
蛍も私乃書　我の蚊　兼
梯入ぬ新八六半の前すて　角
御所は如せうくせと考ふ　蕉
人の懐炉　穂長の香代厨子長く　晶
松田くびすき　雪の暖　雪
きさかしや陳中は仏を新うく　角
山に野は刈く俳を貪うる　兼
盗に弁の身は伯夫の足あしよ　蕉
とくさハ武士の憤草　角
石ゝ武敬寺と石ゝや宝掩　兼
炎ひさんやそ陳ゆる亀　晶
鮭の庫ゝと母まさ　雪
つひは賢ゝ有ゝ　蕉
苔は栖庁山の列とらひん　角
柳よさぬく瀑布ゝ酒呑　兼

彼岸ゝ日新やうゝ　芭蕉
煮茶ゝ蝿　避ゝ烟ゝ　素堂
合ゝ歓　醒ゝ馬ゝ上ゝ
かさなる小田乃ゝ蔵ゝ　蕉
月代見ゝ金　氣ゝ
露繁ゝ蔦ゝ玉ゝ延ゝ　蕉
佛加ゝ物ゝ有ゝ　蕉
幢ゝ古ゝ有ゝ　蕉
掣ゝ帚ゝ驅ゝ偷鼠ゝ　蕉
田ゝ麦ゝ古ゝ　蕉
ゝゝぬゝかゝ　蕉
氣ゝの学ゝ何ゝ　蕉
舟ゝ鉤ゝ風ゝ早ゝ浦　蕉
鐘ゝ絶ゝ日高ゝ川　蕉
新ゝゝ苗ゝ　蕉
食ゝすけぬ妓ゝ　蕉
詫教ゝ三　社ゝ本ゝ
韻ゝ使ゝ五　車ゝ墳　蕉

花月丈山閑に　圭
篠をおつく老はづくひに　蒼
黄銀鮎一寸　圭
箕面の滝や玉を簸らん　蒼
朝日新頭の旅とゞやらし　、
鳳飡喉早乾　、
よわりつる蚤のあふあつて秋の風　圭
門に火をともす庵の夕月　蒼
霧籬顏魏喋　圭
霖浦同潜尋　蒼
ふとん着て寝ずに都の香の夢　圭
いずれぬ談乃敗跡と成て　蒼
山伏山平地　圭
門番門小天　、
鶺鴒窺水鉢　蒼
雲よくるゝく鳴る雲やさき　圭
夢深き初冬の霜を其ままに見て　蒼
臨谷伴蛙仙　

枝風

時節さへ伊賀の山越花の雪　桃青
身ハうとふ霰む武蔵野　、
店賃の高き新宿に春の来て　風
こゝやかしこや手を使　、
霧白く振ふりハ名残の月をし　路
たゞこゝ禄ハ八つか七ツ丸
麻蒼共例の席に夏見えて
咋日の酒と昼の月とも見え
凄雲の消く寄り漂き紙帳
親仁こ来の山下風の
古人の松とひらる境の枕
未だに深く降る條はく
探出る筐の雲に秋の月
高ふし初の紗ア夢
伏見驚あまたハ秋の風
かこひをこふる手枕の霜
一生ハおとろ気の流き家出
世をさきあまかりしても

ちりぬさ小部の辰巳山見えて
娘の中とさきし寺子小な
若髪に立名と包む緒の功
源氏をむすふ編笠の紐
落しさし公の中そ衰ける
茅川さくる田ふきの志つ寄
又猶つゝくきむ法師哉ふ
いさごを蹴立尾なふ鞭
森とほゆく秋深き月に旅衣
三里斗の旅の朝霧
追剥に逢もあり崩さ津路寄
うけて流いさたか風の茶
蘆屋の松よりかゝる花を隔て
面やうらちやゝとそめてゆらん
清ゐる手摺の幕の谷新
火縄のちゝの一二寸程
何ゆえ緑摘る花の旅
江戸よりも上野の峯の春



時ハ秋吉野をこめし旅のつと　露沾
雁ともねに風雲の月　芭蕉
山陰は刈田の白ひ穂かきよせて　沾蓮
武者追話し下川の水　其角
菊かゝる家は流るゝ横ざまき　露荷
とろさぬ宿に枝歌く松　沾荷
傘の画をちくかゝるさそげて　蕉
系むゝし神山代氏　沾
暑き日乃汗を絞む猿の聲　センカ
挽しゝたのよそかゝる　蕉
汐ほまゐものむらし法も秋く　角
蟋あり。俺に襌つゝきゆ哭　号
無とり篠くし山の奥深し　沾
志ほる扇をと白き風薫　嵐
月清く白雨ながる御簾の燦　蓮
客と法の宿く観てくし旅　角
色嗅ぐ人とまらる寺の庵　号
額板ふるふ山吹の椿　センカ

伝説ゆゑ多くの涙の袂にて
磐井うるさく多賀の国
備の国より新文幸を出給て
井ゐて許を まあのさくらの
和歌は西ひ安をさかふ月清く
乗をを宮もる夜のあさけ
雲ちく壁後をかける秋の雲
九穂ゆひさし尾上さるけき
風の音なく小蘇鉄のいあく
大口をあける 庭の雪 掃
夢もなく 塵の雨 立く来寝
能とう 篇と編て 清て
一抽の形なの連家 勝ま 雪
名と聴ぬつき 紙の そひ
西ひく 読ま 中の男 つき
所たし 紙の 清 神ま の 雪
裾 織 色 の 袖 乃 を さ 折 く
仰の水乃 ま く ひ る 英

清法 蓋 日力 セニカ 蓋 另 佐 蓋 蓋 佐 セニカ 日力 佐 蓋 セニカ 蓋 牧管

貞享四年十二月廿四日 御修覆
うゝ 熱田社 えまゝ 桃青

磨 雪を 読も 清 一 言の 世
ゐ 義 庭乃さ 由る あひる 相 紫
時く い 松 笠 歳る 風 や
赤 ゐ を く ひる 山 の ひ あ ひ 青
秋 雪 く 月 ゆき 園 の ひ ひ る 都 青
つ え ま ひ ひ ひ ひ ひ ひ の ひ 紫
肌 き く 有 を ぬ 袴 と 袴 ま み 、
こ ほ る 鱈 の 里 ひ る 清 力 青
乃 ひ る 鱈 塗 飯 い ま ひ く と 紫
や ま ひ 出 乃 境 青 庵 青
古 畑 ま ひ ひ ま ひ る 麦 刈 く 紫
和 味 の 麦 や 聖 て る ひ ん 青
松 肖 よ め ひ 刈 秋 の 風 紫
ま を ひ の 表 を ひ る 月 青
紫 中 雪 乃 花 を ぬ め な る 紫
温 泉 い 雨 を く 人 を す き め と 青
世 塚 の 廿 八 色 乃 各 な 打 ん 紫
長 ひ 信 泉 と 呼 る 法 し し そ 青

胡蝶よくまれて後の雛子の移
ゆくゝるる坂乃高うけ　茶
乃河る一里乃河原紅ひく　青
あゝ小流む新の初際　紫
初興いく度こけく紅なるう　青
初宴とまとの宴てそ高乃　紫
鶯原て後もむ春を医うと　青
塩釜を出乃俤色那乃　素
干ゆゝむ松すゝ似る春を　吉
駅乃聲の　春宵目覚る月　紫
秋山の伏猪と昔る春くよ　青
百ひとまちと州分る　菅　紫
優婆塞の所属節る文俤く　吉
義人紀を　松そ的よる　、
笑草よぬき栄いの雨の春　紫
の桶の石る　切牛よ　、
西明乃と栄よ　吉
雲の袂よ　敏う　茶

冬京やく京かゝぬ市の柄　渭子
ゝ形ゝと速入れ乃重其角
年れ貴たゝ頃ゝ俳して芭蕉
大と焚舟れ早ゝき市　仙化
雪ゝゝ松おゝゝ後の月　枳風
挿ゝゝんすた一むら　コ矢
太力拍る春の乃て寒乃　化
車のゝ乃よゝむ玲むし　子
乃来る友引地秀茅くく　角
焼しや似よいちちひろん　風
くゝ後枕よ添てれゝて　化
沖分合此日やちちき乃　松　角
賀茂川の俳を胸乃大ほさん　矢
義ちゝゝ俳市系のほよ　舟
賜の琴ゝる杖ゝ多まれ　文鱗
牛を彩ち乃月れてえき義　子
花の日と新心乃もとかゝれ　李下
桃ゝ後う一玉の研　風

和歌賢者となる人和又えて　角
河の海かと給ふ一段をも　角
松しまや雲石の庵よ海をの　下
んとて婚すいくとせれえい　女
ぬつの時久しいあれのさと　リン
ゐ伝ひけ　殆至きさ所れや　系
行里の庵をのむすこ角入て　子
伊勢おとひとつる難菱笠　女
天流なるや拾ふ時和よいひ　化
形を破る切籠おう　下
月入て稲妻砂ふ角すこく　子
きれ弟と為人やき系　系
塚の下毋をかんん秋の角　角
邦と軍てきを見ゆくて　女
それのれくるつを持つきて　化
すり餅とゆん月白雲　下

房梧
ちれ家殘く雲れ名ところ芭蕉
賜の原里の垣根よ餅とこて芳分
桑のおろ人原ほそきちや越人
あり吹の雨ま八人のかをは蕉笠
みなかて和の入ふ俗秀　舟泉
信石まあり又を歩ん　呼水
萩よなあて竹渡し村　枕
彼衣る真毛にくれとへて　蕉
あれ髪刺よあるるけ　宇
稚おて金よおんちかく　人
ゐ望とけるよ菊　笠
雨ての烟雲れあるちう　泉
咲とくて雲る秋の母　水
系をを雲かをちる月の下　枕
きる目のをれ眉れちて　人
思ひる徒つを堂のむちを　水
遠ひゆく塵の言るく宋々　泉

青〳〵やうやうぬるのもゆるて
碎てちるあるは 桜乃うく 蕉
タ月ハ順をうゆ葉池す 兮
り水ちるかされ思ふ 水
直ゆる木陰の馬乃かうれ 蕉
ずようきゝ蒔れ乃ろし 桜
ゆるけきハ絵をさして 人
女師走ハ月とちうふう 兮
雪の日乃きゆるを湖おく 水
宋焼瓷のうれてほろ〳〵 蕉
砂糖の川乃ちうれをあるて 永
終て牛をハ拾ひ給ゆく 水

貞享四年　芭蕉

星霜乃雪をたのもや宿乃春
私 侘の秋 瓷 乃 煙火 安信
藥山乃奇ゆ絵よ桜を極ゆく 自笑
桜ゆ子猫乃恋よ蓬ゆく 知豆
蕾乃麦畑を祢月のわの之 葉言
器のあるさ乃壁迄きき風 如風
一里代を毋ゆの秋く川上ふ 重辰
和さめく門ゆを気こゆ 言
市くゆくをを師之れ 之
牛ゆ桜ゆを言さ乃をを 信
秋白乃奇ゆなゆ我家 風
月をはゝ乃ゆ蝶昊の酒 蕉
言級ゆ甲をゆく秋の之 笑
涼を和ゆ宇治乃橋古 風
菴似ゆ西行岩のあちゆ 之
啄木鳥のあく枝の古枝 信
ちくゆを金時をつを乃ゆ 辰
ゆ代裏ゆをゆく八流ゆ 之

辛螺うに油なうて磨ぎ角あれば眉うに化粧をする事
仮寝乃夢と覚さく帳の内
帰りわぬ雁よ桜あつひ
飛なくて砧の音よりうひ重ん
度をゆつもし家のつゝ者
武日代日を加さみるさくむさく
御さき第代あれば川口
様平は頗有るみ
参拾あつ川渡火乃新
初夏よ所里乃成の川夏
磨をかを移く前和初く
鶏旁よつきハ鶏の鶏寄
あう移屋なめかめ
出人乃底宝をあさ毛さう
雪竜いくむ代の歩うを
四と返をあうる山の名を宮
裏乃ゆう続とうをあ

風 爰 言 風 信 足 風 辰 遠 矣 足 遠 辰 矢 言 風 信 爰



御手習

狩るこかしの月八幡宮御ちる
さうやとハるる山の山寺
有明乃月ゆよ酒屋つゝ
かしらの霧とあるあるる
鶏の鶏のほう出きの句ちる
日代ちうくよ雪よ雪と州
京竜ハ雪よやうかと
賛えやすをとあうる
いうう代法しと乳を高り
きえぬうくうよすくくとす
新法の蛾を山くを少を蛾く
あるしハ雪よ半えし空家
田中なるこをんうを柳高るう
嘉物よ不ま引人ハちんえう
たうあと楼よ鶏の月山し
儲さうしよ町よるを乗る
二の尾よ近海代海の壁き
妹ハむくよとうを異ら

野水 蕉笠 杜国 正平 京 京 京 京 京 京 京 京

乗物に簾透顔おぼろなる　五
いまぞ恨の矢をはなつ声　兮
ぬす人の記念の松の吹おれて　蕉
しばし宗祇の名を付し水　国
笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨　兮
冬がれわけてひとり唐苣　水
しらじらと砕けしハ人の骨か何　国
烏賊ハゑびすの国のうらかた　五
あはれさの謎にもとけじ杜宇　水
秋水一斗もりつくす夜ぞ　蕉
日東の李白が坊に月を見て　五
巾に木槿をはさむ琵琶打　兮
牛の跡とぶらふ草の夕ぐれに　蕉
箕に鮗の魚をいたゞき　国
わがいのりあけがたの星孕むべく　兮
けふハいもとのまゆかきにゆき　水
綾ひとへ居湯に志賀の花漉て　国
廊下ハ藤のかげつたふ也　五

霜月や鸛の彳々ならびゐて　荷兮
冬の朝日のあはれなりけり　芭蕉
樫檜山家の体を木の葉降　重五
ひきずるうしの塩こぼれつゝ　杜国
音もなき具足に月のうすうすと　羽笠
酌とる童蘭切にいで　野水
秋のころ旅の御連歌いとかりに　蕉
漸くはれて富士みゆる寺　兮
寂として椿の花の落る音　国
茶に糸遊をそむる風の香　五
雉追に烏帽子の女五三十　水
庭に木曾作る恋の薄衣　笠
なつふかき山橘にさくら見ん　兮
麻かりといふ歌の集あむ　蕉
江を近く独楽庵と世を捨て　五
我月出よ身ハおぼろなる　国
たび衣笛に落花を打払　笠
籠輿ゆるす木瓜の山あひ　水

背をこゝろ坐に涸をおろす　蕉
乞食の蓑をもらふしのゝめ　兮
泥のうへに尾を引鯉を拾ひ得て　国
御幸に進む水のみくまり　五
ほにてる年の小角豆花もなし　兮
萱屋まばらに炭團つく臼　笠
芥子あまの小坊交りに座を定て　兮
おるゝはすの實かせる蓮の實　蕉
吉川さまは飯茎のさく月の友　五
露おもくさつ狩風やられしまな　笠
釣瓶てこゝろ根ふれる行鹿　国
豆腐つくりて母の喪に入　兮
元政の草の袂も破ぬべし　蕉
伏見木幡の鐘はなをうつ　兮
いろふかき男猫ひとつを捨かねて　国
春のしらすの雪きゆくなり　五
水干を秀句の聖わかやかに　水
山茶花匂ふ笠のこがらし　笠

炭賣のをのがつまこそ黒からめ　重五
ひとの粧ひを鏡磨寒　荷兮
花棘馬骨の霜に咲かへり　杜国
鶴見るまどの月かすかなり　野水
かぜ吹ぬ秋の日瓶に酒なき日　芭蕉
荻織るかさを市に振する　羽笠
賀茂川や胡磨千代祭り微近み　兮
いはくらの聟なつかしのころ　五
おもふこと布搗哥にわらはれて　水
うきははたちを越る三平（ヘルカホ）　国
捨られてくねるか鴛の離れ鳥　笠
火おかぬ火燵なき人を見む　蕉
門守の翁に紙子かりて寝る　五
血刀かくす月の暗きに　兮
霧下りて本郷の鐘七つきく　国
ふゆまつ納豆たゝくなるべし　水
はなに泣桜の黴とすてにける　蕉
僧ものいはず款冬を呑　笠

白蘋洞ぬ中を羽と陸ひ
宣旨かしこく叙と被れ
八十年とこの方童母もて
かのさちを山る七夕のつま
曲面より樹はものつ曲愛とき
薫はあるかるよ木ト末寿
姫の家は貴物世をくる
的顔に霊とあ人目の元
そ寿をく拝よ
陸く美を河る弁条乃交
寅乃日の見を服治の条愛く
きかうをき南京は地
いうきして陸とも古人の像
陸よあるる乃きよ芹の花
弾する陸え花よかしこう
指云のうを陸ものをを
わはさなくく簾おしやて
祈はは男夢と寿る動白

弓 土 水 国 芝 蕪 土 弓 国 水 蕪 芝 弓 又 あ 蕪 芝 国

お半男

陸ををををを海寸寿元
こ山や 蛙くけりあのいなつ戸 重土
歯男の蛙と物物人の寿有く 野水
わの山門とかし あらはのをを 色蕉
馬葉掾あつきに風のあすく 荷了
蕪はは陸者とを 蕪人陸の合乃合 正平
ら生けよ和よ山蛙ら つ山て
燈を竜 ゆ山はなきひをゆ
雲萩のすは山乃と撰 乃蕉
蕎麦さく寿し 陸蛙蕪の坊
新月夜双六ら乃核庵しく
和花買みらよ陸ほとを陸少
青陸の陸のつさを雛と低寿
蕪帰の男ら蕪んとす
ゆる紀すて陸陸のまら乃打
仏食きる奥 蕪ト 蕪ら
縣ゆるを乃ん陸蕪と作乃く
不形 堂乃 富 六反

壮 国 弓 あ 弓 国 不 弓 蕪 土 国

うれしげに囀る雲雀ちりちりと　蕉
真昼の馬のねぶたがほ也　兮
おかざきや矢矧の橋のながきかな　國
庄屋のまつをよみて送りぬ　水
捨し子は柴刈長にのびつらん　兮
晦日をさむく刀賣る年　五
雪の狂呉の國の笠めづらしき　水
襟に高雄が片袖をとく　蕉
あだ人と樽を棺に呑ほさん　平
芥子のひとへに名をこぼす禅　國
三ヶ月の東は暗く鐘の聲　蕉
秋湖かすかに琴かへす者　兮
烹る事をゆるしてはぜを放つ　國
聲よき念佛藪をへだつる　水
かげうすき行燈けしに起侘て　兮
おもひかねつも夜るの帯引　平
こがれ飛たましゐ花のかげに入　水
そ代里の白紙家を松明しく　蕉



お尹畧

はつ雪のことしも袴きてかへる　野水
霜にまだ見る蕣の食　杜國
野菊までたづぬる蝶の羽おれて　芭蕉
うづらふけれとくるまひきけり　荷兮
麻呂が月袖に鞨鼓をならすらん　重五
桃花をたをる貞徳の富　正平
雨こゆる浅香の田螺ほりうゑて　國
奥乃きさらぎを只なきはらす　兮
床ふけて語ればいとこなる男　水
縁さまたげの恨のこりし　蕉
口をしと瘤をちぎるちからなき　兮
明日はかたきに首おくりせん　五
小三太に盃とらせひとつうたひ　蕉
月は遅かれ牡丹ぬす人　國
縄あみのかゞりは破れ壁落て　平
あら川しとゆく地蔵切町　水
初花の世とや嫁のいかめしく　水
かぶろいくつの春ぞかはゆき　兮

京すてゆきなりそしやの雪乃宮　芭蕉
千鳥　吉そ〳〵く山路の月　糞言
小蛤　あはれとあはれ袖ぬれて　知足
酒　ものもさむきはうらの月　如風
川　後〳〵蹉跎乃盛を打拂　安信
僕　おくれ〳〵牛いそくし　自笑
月　ゆ川をつる夜嘯の鶴　重辰
明日乃命　級々あり　信
ひろ〳〵あれとゆかぬ山ぶし　笑
蛙つく〳〵あるひ　蕉
そのまゝ〳〵別の後を一ちひ　足
なつかしき　鄙の稲刈　言
髮　角乃熊乃神の名もつく　蕉
名は癒　秋ハ病苦　風
的　廉の命はたゝかとゝむ月のあ　信
楊枝　すゝめ　ちゝ　足
小神　〳〵　苔の風　辰
こゝ　猫の子を　言

うさ年をとれるくはらら漁夫あ
父乃いくさを新ふしの長ノ
松けよをこ一州あるの法の夢
翅を四方ノ橋ニ乃ノ
鄰者ノ長ニ釣日をいてゝ
三度ほゝうる勅れかけ
山吉ノ車ノ名月ノ本を荷ひ
極形ゝゝ岩と
滝清流ノ清ノ新鮮
楓ゝくゝ 昔れ
屋やゝく月いむ
老魚うゝと波
手ゝ
陣乃仮屋ノ 蒸ノ
山ノ上ゝ
手をゝ
忘恩をみと集る 恵 安
沖地乃橋

足 素 笑 言 信 矢 素 足 風 笑 言 素 辰 信 風 足 言 年

尾張国熱田まゝの
浜辺乃海ニ牛と船ま

海苔ゝ 鴨の夢 ほのゝ白
串ノ 鰤を あの
二百年 家 山ノ 斧
撰乃 種 ノ 秋
入月ノ 鶏乃 昔れ
昔ノ 国れ 秀
清雨ノ 光ノ 毋乃
一鰤 ゝ 昔 菜 れ
蒸れ 立ノ 二日 冥
国ノ 海ノ 楓 ゝ
昊芝 ほノ 系 遥ノ
花表 ほけゝ 系
差 蒸ゝ 衣ノ や
秋ノ ノ 人 蒸ノ
を ひノ 壁ノ れ 浜
雪れ ゝ ノ 蒸ノ
忘 星ノ ノ 蒸ノ
美人乃 形 係む

海 苔 ゝ 鴨 の 夢 ほ の ゝ 白 串 ノ 鰤 を あ の 二 百 年 家 山 ノ 斧 撰 乃 種 ノ 秋 入 月 ノ 鶏 乃 昔 れ 昔 ノ 国 れ 秀 清 雨 ノ 光 ノ 毋 乃 一 鰤 ゝ 昔 菜 れ 蒸 れ 立 ノ 二 日 冥 国 ノ 海 ノ 楓 ゝ 昊 芝 ほ ノ 系 遥 ノ 花 表 ほ け ゝ 系 差 蒸 ゝ 衣 ノ や 秋 ノ ノ 人 蒸 ノ を ひ ノ 壁 ノ れ 浜 雪 れ ゝ ノ 蒸 ノ 忘 星 ノ ノ 蒸 ノ 美 人 乃 形 係 む

腸 桐 葉 東 蒸 山 ユ 蒸 蒸 山 蒸 蒸 蒸 蒸 蒸 蒸 蒸 蒸 蒸 蒸 山

蝦夷乃舞鳥あさき嬉しさ角を傷て　益
生海鼠干ほとゝ秋ハぬかくり　荻
木代月より西に御堂は後に向く　山
藪ハくさやの十もうり見ん由　益
ぼつくと蛇蝶作り祖ハ発ら　荻
家にて苔あし　痛の咒唄　崇
不二乃根と笠着てくらふ露らう　益
底てり鶴乃ひとつ飛しむ　山
諸葛よ鏡と志のひ着敷ひ　崇
衣の清く小性萩の声と押　荻
月更く時斗乃宮ハゆうりて　山
棺を急く消さく乃霜　益
被きる身足と思ふおくる　荻
言篠の雖てり曾作を言　崇
紅葉乃庭露よ芸の手と彼　益
ちいさ筆京代水き日の伽　山
東雨乃形發色縁荷ひ来く　崇
青草ちしれ花の撮れ　荻

貞享五年春

何の木の花とハしらす匂ひ哉　はせを
こゝに飯しと含むうくひす　益光
英源き笶の椿ある雪揮く　又玄
二葉のすゝき法華清たり　平庵
有明乃草紙をときぬよ川つたき勝　延
涼さるハなうらな秋の油火清　里
鈎樹よ嵐の面子青ゆうく　光
門ほそめなる田の中代あ　益
山路来く清み締あり袖の汗　菴
わつうふさ良をしむ恐つき　玄
廿のく古き法能乃被きれ　益
碁よ色ちつきく洞落つ　延
いねうよ酒さ人すさ和ぞひの人
陣乃夜屋よ俤のこ乃て　光
白雲よの傍まと夭と殺つひし　里
そし給くゝ帰る出の神稲　庵
識る自と蔵き峡めの宗よらんく　玄
登よ志ゝ流く揺りしうし給　嵐

神仏はやとうとき事なる法華の門
医王寺より法華寺へ　きめ　仏
ゑんさと池のあやめと打籠て　人　延
水鶏を過る　紀一　あらき　玄
たてこ吸毎のあとの煙　菴
多ゝけうものは書くるまて　玉
ゆこうを楽乃一をはなれて　義
釣乃ま子　浦ハさひ　光
あるゝ　玄　秋の蛍
志ゝ　延
笈ゝ　人
ゆゝこ　菴
ゆゝこ　光
親ひ　義
中川　紀　代なし
雑　正永
ゆゝこ　玄
掉　延
乃ら　人
短冊　こ　弁　垣乃夫

自京子立成辰ゑ七月廿日
お行茶杉長虹異切　ゆゝこ
ゆゝこ

栗鉢　ゆ　ゆ　ゆ

のとゝまきをふかうまあひのあ〜後く
本百世〜まつ子ゝ重ふ
多恵きト紀つまもきかゝ
如亀 打 抑 すこき 夕暮
さ夏〜乃多うとう る月の影
人一代の恋と とゝの 瀧
捨〜世を蔦代 脈も〜むし〜
知さ形くあもと影さあ〜ハ江
懐ゝつきさ〜 長く又ある
下戸とみくゝる雪の取立
お咲乃毒と紀ゝのたとゝの
嫁もめ む世めれ眉 加て 長
志のひ多ゝすゝきあ江 垣の奥
姫ゝきやさもれたのとゝ 失
明あき形とおせ〜ゝの 服 ゝく
るふと 呼 打 本 ゝ 変 ゝ
義よまれすもれ 蓋 あ也 面
簾 ゝり もゝる 乃 多 者

写 及 保 井 人 芭 江 人 及 写 芭 保 及 人 写 芭 保 如

イ〜と枝のむれ社ゝちる
ひゝう系を指義のひゝう赤 芭蕉
日新山雑子の離とれ以まて 叩 惜
清水をすゝ〜る 柄 枝 月 黄 口
ゝりゝき世ゝる 鉢 麦ゝふの上 東 森
花れゝや本ゝ 接 子をほる 工 山
ゝゝ紙ゝ 都 のゝ宮ゝう 也 付く 蕉
多ゝ大 津 ゝ ゝ 井 の 待く 惜
雪をゝ ゝ 後 の 焼ゝ 社 ゝ ゝ 山
庵ゝ 野 ゝ ゝ ゝ 焼ゝ 社 ゝ ゝ
杉風の答ゝ 泊 と 欲 つゝ 楽 口
佛 と 刺む 西 若 世 信 森
鳥 ねむ の 繋 ゝ 体 女 ゝ 惜 森
庶 と ゝ 破 る 新 石 の 月 蕉
牡 ハ 行 ゝ 味 ね 答 ひ ゝ 楽 蕉
石 る の 大 夫 ゝ ゝ ゝ れ ゝ 西 山
股 ゝ る 鯨 の 貴 ゝ ま れ ゝ て 森
後 千 寸 於 ね の か つ ゝ 言 ゝ 石 惜

相楽

笠打て雨ふる渡男　蕉
又きつ塔乃ほとゝぎす　桂樹
鶯　鶯ぬ花を拾の間よりかけるまて　楚
風ふて月ぬくく〳〵の寺死　山
ゆゝうて朴の屋敷をり枝ぬ　蕉
田舎祭りゆ物乃人ぬ　口
おりゝ〳〵ゆゝれの書とゝゝく　蕉
たゝれて天ゝ紙ゝ伯翼より　楚
紙の衣ふ　鶯　藤うせく　山
おほん俳京の時を吉ぬ　蕉
鞋　鞋の東乃寺ぬ月待く　楚
桂　ゆの栗ぬ行をまゝよくて　蕉
俳味てまゝ俳林の秋乃ゝ　蕉
ゆ風ゝかゝるの風ぬ琴　山
あゝゝ高ゝ和妙て塔ぬ　蕉
入日ぬ紅乃月ぬ　楚
ゝちの使ゝけゝゝ　蕉
けゝしの衾ゝゝ西行　楫

洛川の夜　鐵人

乃ゝ多ゝ高川ゝ多ゝ　ゝ
酒ゝひなゝ　ゝ　ゝ　ゝ　芭蕉
篇ゝ多後ゝ霧宵ゝ　ゝ
理ゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　人
瓢　菓の大さ五石ばゝ　蕉
風ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　人
伊ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　蕉
醫乃　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　人
ゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　蕉
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　人
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　蕉
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　人
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　蕉
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　人
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　蕉
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　人
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　蕉
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　人

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]田の橋まハ[illegible]
[illegible]を[illegible]く[illegible]を[illegible]る市
[illegible]れ[illegible]書[illegible]市衣
[illegible]一七日戸[illegible]
[illegible]の[illegible]を[illegible]
[illegible]ハ乃曲
[illegible]ハ伽[illegible]を焼乃
[illegible]れ竹垣
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]　蕉
[illegible]　路
[illegible]　紫
[illegible]　蕉
[illegible]　路
[illegible]　桑
[illegible]　蕉
[illegible]　路
[illegible]　紫
[illegible]　蕉
[illegible]　蕉
[illegible]　路
[illegible]　桑
[illegible]　路

元禄元年辰六月

芭蕉

大津京唐崎の奥の松　芭蕉

葦乃露　紫雲　時雨　孝香

七夕　尚白

初月の新き琴またゝひて

石ゝ　自笑

松の色を秋風の[illegible]　通雪

[illegible]　松洞

うかゝる世を到る日を積る　春雨

失敗は流のゝ[illegible]　蕉

古塚は古にも[illegible]を捨ゝ　笑

[illegible]　秀

[illegible]　宣考

[illegible]　白

[illegible]　洞

[illegible]　白山

[illegible]　蕉

[illegible]　笑

[illegible]　白

麦食は常招く友有り　雪山
されば　ある　ことの　滝の音や　考
やまの火の　かなたよりなる　松の梢　官江
出ぬるとき　そのかの舟の　面影　竜
月心の　とのくに　郷きぬ　ぬしの墓　道
遠ノ　ノ　く　庵の子を　棹てり　雪
中の秋　寒　流　有る　井を　地蔵　雪
三　法　ちう　く　萩を　雪　秋
うさ　人を　誉　く　八　る　月の　分　白
大勢　家　く　あ　そ　た　月　女　秀
一条や　二条　多　の　小袖　賣　内
牧　よ　若　こ　た　比叡の山風　小
と　う　く　と　言　や　の　く　衛　江
春を　待　の　く　く　る　あ　た　雪
碑　附　小　伯父の　新　人　見　る　雪
辺　ノ　姉　ち　み　と　う　こ　る　誘
桟　く　む　毒　た　る　の　を　樹　益
ち　き　多　陸　る　そ　の　秋　央

京洛の　金剛　寒　枇杷
あつ　祝く　そそ　ぐ

秋　角　の　人　と　桜　打　の　夜　明　る　れ
ま　き　霞　多　と　こ　ま　て　堤　の　柴　寒　枇
村　雨　よ　市　乃　仮　屋　を　吹　と　う　て　軍　長
町　中　我　ゆ　く　く　川　者　北　月　道
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　枇
秋　菊　風　く　か　ら　ち　ら　め　ば　し　ま　そ　ま　す　く　く　く

おのゝ羽よ雪ふる蟬丸山車　枳
日傘さしたる女旅ふく春の雨　帰
衣と捨くうろ雲世の中　枳里
酒の色を谷の杉原も仏心　道
猶人恨る　猶乃松明　良
蓬武士は明日の尾四方の雲　枳
袁の遠ゆるよ水の行さき　枳
日中は錆つく鎗よなうよ久　丁
一釜乃華も枯ぬ紫の蓮長　良
乞食とも去て世の和尚　物
泊乃地蔵よこゝ見る明　枳
菅は塔ハ猿の涙や深ぬ　枳
流人策州　帰
午中も又紅日と沖むの上　道
茶とさい　帰
奥ちゝ　二
錆のまは雲　す
奥の風雅　良
時しらぬ稲　枳雪
生蕎　枳秋　鶴

奥分岩隙那相楽伊賀
文政

風流のたゝ免やたくの田植歌
いちこ咲ぬくあまみの草　雪船
ゆせきゝ立庵乃名ゆん　雪長
羅て　鶴の声　せう生
一蕗〳〵月よ益方き川柳　道
月雪や移ゆく村そ秋なる　船
賜の女う上弦会仏よ亀と浪　良
世と毎の　やとまむ　苔
ゆ月ハ蛙すゝ多はへ　船
樟乃小枝ゆ意と陽て　良
原ゝてハ嬉う島の名ゆく　道
雪陰やすや白髪おうけ　船
海鹽を軍を送る軍よ来く　良
秋と去る夕やゆ後〳〵俺　船
ある夜の蛙突破る庵の角　良
畑乃仏の法ゆる月　道
多く〳〵祈と毎よこゆり蛙く　彩
かゝふ〳〵さ貴と繋ぐいとゆ　良

山吉氏尾は[illegible]年やむうみ　芝
芹城そうは法はつめさ茶　彩
蕨門雪車一生ちの法さて　古
おのく武士氏を竜ち宿　芝
年とぬとのゆく高の世あを　彩
文うとしーうきくあとうし　古
自松は細き絵をさしー今く　芝
何為ー事のるーめ七夕　彩
位智一宿の柱乃月を見て　古
ちきおうむ六角う奥　芝
切樽枝うさくは　イニさは　樽　彩
太小法ーみの彩ふとうう　イニそ　古
さいーさや酒ちも寄ーあふよ　芝
穀生不乃乃ちーー孟水　彩
色をきうるを接切を等く　古
酒乃乃ふひの研る夜酒　芝
六十氏後こそ人の正月京　彩
智的出る意あふ和きぬる　古

元禄二年卯月廿四日
象井孫三郎宅ニて　芭蕉

隠れ蓑やめて笠をと新の栗　芭蕉
ふるよ栗乃しとふる家ふ　栗房
切株ふ山の井氏名蓑ふく　智彩
畔伝ひふる石氏柳もー　黄良
昔うるを山栗ふ月を見のふ　等雲
昔屋乃秋ハいとふひふ　須竿
樽与ふの羽乃家を智ふて　素薫
頭手をふ為るあうきの芋　芝
松薗取ふ呼ふるうるのる　秋
酒乃きー帳をふ乃形ー　彩
寿へふ設ふ時なてもうふる　良
さ形ー送氏ふ　栗
智ーきを神ふうもる掲き子　芋
月の形法をふ形ーふ　栗
特ーて俗奥弱為ー　彩
益乃陽をする　秋
樽ふ山く初　彩
うをのる谷ふ　良

何るほとゝきすをたゝまるゝ事はあ
めゆかさきぬ夏はなそらき
よゝ雛をいさなるものゝ
かゝえ〳〵ゆかれ藤や卯たき
猶霜の多さへ古きは所の旅
水城うさ家市のちゝ碑
切俗よ三社乃祝を載きて
奈今ゆてゝ大つ此雑
四五日ハ浦野乃事よ到く
さいて月とゝろあるのや
多なくらひ多き里乃山ゝ
庶乃者絶くふきぬ家
冠をも家をたうよ法志
文をつゆるゝあめひと那
志ゝ世ゝ世ゝきゝ人なきゝ
事もせきさらゝ志の五
合ハ四門よ法乃を の山
法えめ絶とも山る 菩生の拓

菜 船 等 蕉 水 を 所 秋 船 菜 秋 良 蕉 船 菜 良 を

松の宅台家月
沙子川絶とゝ
風中日乃ちゝ
月所ハ八絶
礎ハ只何ゝ
世とゝく加ゝ
比ゝ也俗乃河
事ハ月乃八
一俗ゝ世の同
三の明ゝく
ゝ乃ゝ事の
石なき川よ
連ゝ孫をと
月ハ馬毛を
影多の如ハ
毛乃あよ
おあきハせ
妹 兼 とそ

家松ゝ乃の松とゝめを
かゝ乃家門の海土ハ
家ハ乃ゝ
序ゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]村は[illegible]の[illegible]
力持ちの甲賀乃一郎[illegible]
むすこ[illegible]
その[illegible]は[illegible]松の木
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]月
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]

金閣の奥も一歩まあるべきなり
常盤乃都より豆腐もつめる
什富士先あさきとや答物て
霞老かうれ化粧うつくし
遥々ハ月を流脂を紙衾
雲くふ 女をうく勢く
千日の滝をもむ苔の小松示
堤より〻と踏法のと高
九九九

知以て本魂よりしく変の風
すくさハ滝り清る山姫
剛力う聯つ戸閉きさる無偽
棺とおさむる塚のあ芝
そつ雲ハなるなき光を移ん
えひ寄の初逢くそ泣
昨日志発寄丁を倩よせ垂て
月さへをとき陣中乃市
は寄をを着うれくる屋一流
小袖をう勾を送る蔵の師
家良の母よ仰ちゆりを
多ちよハあるぬ家ハ流
奈ふ乃奈拾伝くる古今集
あり射切る坊乃酒を
雪代菓を立そ山る羽つひ
磬稚ることて第多よれ
称本と仰て古き垂を乃
こをれ色をこの山京遊

玉 道 良 玉 道 良 玉 道 良 玉 道 良 玉 道 良

羽黒山本坊よおのく異別 を義
有難や雪と華ってを風の香
伊吉ん人乃むを夏草 雪九
川舟の得よ蛍をしを 重良
猪の巻の絵よ南 三日月 紅雪
泥ゆよを深つる秋 (三月) 陳妙
小も南をきぬさ おそ
ぬはむて星を久を 雪水
百里乃藤を本重の牛遍
山つくを知よ塚の記をかる
斧拾をくむ 祇本代 枝
京をの絵をひ利 有方て
豆うをめ男を何と為く鬼
古古京をちよなくる桜皮菁
糸よ立枝よ為く代藤
月尺をを門知乃て
髪あの為るうよ
まつをを大のかをよ色打て
的切乃事を咲る山吹

雪 九 道 良 水 藤 道 九 雪 良 九 道 雪

[illegible]と姓し七つのとし[illegible]力石
[illegible]く[illegible]く[illegible]く[illegible]う井の水
[illegible]川のこし[illegible]かさ[illegible]て[illegible]接荒 因八
[illegible]のつ[illegible]二[illegible]
うき清る[illegible]八[illegible]中の地[illegible]
[illegible]恵[illegible]う 山犬の[illegible]
[illegible]ハ[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]乃[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

武士みさきへ東西乃門
おのつゝ奉と唯なる奥代原
四織よ法〻子耳 指の用
秋原〻於〻みさきへ貴乃宣
う多い俗寺る貴陳の若波
意格を牛と行る久乃者
出博の話よ乃西るうて必
寺る信所の者も跡して
ふまこく寄こさ祢宣の白法
ほう〻〻石の加とのの崩久
ち〻さる 山も西の寄きく
咲うるを と左よ 袖あるす
寄うさい於婦よの やや
るうて 山中
元祿二秋爰成れて
温泉よ於よ西の三界 ゆ校
赤堅みよ乃〻 山乃中うめ 華良
月今〻と お樓よ於 踏めきく 芭蕉
朝ち〻ち〻ちやうく乃久
寄うりこうた 寄代毎五
義陳左りの山ハ貴の寺
楚女 四ふ人四今わ山
義寄よ意〻ふ君うて
繁ちち〻ゆと奥くハめ
蓮の糸うて中〻飛像
ち祢乃多と侍〻〻る門
有の糸代上産かさくなる
寄よ川 拂よ 獺乃う井
秋風ハ和云ぬ子 陳す寄
白きあるの 続く 華祝
寄の寄ハ四寄 乾の町 他
ちと 祢寄 云 仍の 箱

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三月廿日即興　芭蕉

春惜しむ七日堂なる禁うゑ
惜しむ　堂のわたる細橋　清風
足踏みを去すさむ春白
茶一椀とはうる軍の戸　竜良
名月は隣と呼ぶそよぎて　コ科
校見ゆる　さ相の陸を吹　其角
墨染を見ては蝶の叮嚀て　風
内命の乃ち向　輝　白
すてまを付ものの使れるめき　白
一夜のちぎり　鈴の川　意
松明に点ずんと点ずるは　意
すく捨てのあ小流　角
新歌をきめ歌を世なけき　風
こと　代俳をおもの山寺　良
寺を訪ひ橋は秀つくく　秋
如乃ぶ　発句日代句のなり　示
吉川まで八湿泉弦碑を用す　角
三川好く席の一つ吉と　意
秋

きさらぎや彼打甲もたそ　夕
嵐ふいろ青代の星　良
茶ゆ毎は茶筵うれ　夜
世こう室示弟と雪ふる　通
久出くの愛俗の　蕉
旅う橋へあるひ　芭
たるとき八熊里茶の　夕
茶のつくくよほとに　夜
田と買ふ信くくもなき来門　西
火吼うる乳　叡乃入口　意
夕月夜後を後は法きて　夕
そらく寄き秋の岩焼　良
名誠は新酒と春とよろし　歩
ちやさ世代神きき　橋上　夕
打腹くるを送る鈴　西
春も加けく一ものあ　之
高春遠ふ見ふ　意
こてよこうち　夕
こうきの陰　執筆

[illegible]ること軍よ[illegible]ある[illegible]す[illegible]嵐雪
男[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

仙　蕉　書　来　考　蕉　書　牛　来　考　蕉　仙　書　来　牛　仙　考　来

衣ぬぎて物改むるあけぼのの
蟬の名ぞ知る人の心なりけり　乃枝

掃きすてし塵の重なりて田もみん
石乃窟　路通

月移る花乃影を踏あるく　芭蕉

ねぶさ寄せの海の波　川

嶋の子の砂の涯　芋島

萬除子を　宗牛

あらきまゝ家ぬる　宗牛

ちる乃和信ら雨の降さよ　川

振よゝ拭あてれぬ大の髪　良

鶯ぬ花の酒乃加りかも　川

月さこそひとり見ぬ市　良

物有と作の立ま　蕉

赤おさな名を　蕉

花の盃る室の深よ信を　良

古巣ぬ嶋の子と物ゝ面　川

[illegible]

川　吉　蓋　西　良　川　西　蓋　川（イ三良　蓋）（イ蓋　良）　西　良　蓋　西　川　蓋　川

[illegible]

芳　蓋　芳　蓋　芳　蓋　芳　蓋　芳　蓋　芳　蓋

嵯山孫有て

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

良　山　素　素　山　良　観　素　素　山　観　良　素　山　観　竹

元禄二年三月廿九日　伊賀息居ニテ

[illegible]

良　品　楊　風　品　素　蕉　風　不　蕉　芳　素　風　素　芳　残　芳　素

うらやましき紀稲乃穂波の秋景　昌房
有もなき乃中に沒乃月　芭蕉
山陰の内より船おそめく　正秀
煙猶乃ぶとく芳の夕月　舒徑
形まこと銀花の蕊紫ら蕾　乙州
出そうく氣を出ほる忍のうら
罪なきやなやむこそ哀なれ　登好
身い出うりとと思ひ　珍頃
あさ夕つき出と秋と八空て生　磐子
金城てうの月湖乃とも一大　里東
四乃中よりくつも花のおとし　探志
芝居の札乃果あつ色々乃　游力
出嶽より雪を不自由は旅の空　秀
扶寝よりあるる第乃徒し　亜
月新は三階の新と清水の月く　好
芳麦は自ゆめ出る下秋　東
うあるやあ清水の鹿之　力
東風吹去ほる菜乃の舞　子

雖
然
而
朝
乃
露
蕭
不
蕭
芳
蕭
不
芳
蕭
雖
然
而
蕭
雖
然
而
蕭
雖
然
而
蕭

市中ハ物のあはれや夜の月　凡兆

あつ〳〵と門くゞる人　芭蕉

二番鶏なき果さぬ夏の月　去来

原野ゆく〳〵うつる月一枚　北枝

代官ハ郎と名をつけて不用雪　荻角

たゞ〳〵ひやゝしく寺の柳陰　来

草村より蛙こゑ〻なる夕ぐれ　北枝

藤乃花ちらうよりの焼香炉　荻角

そ乙のれうハ毎の食ときを　来

能宝代七尾の名を伝へき　北枝

莫の骨ちらつる老とつゝく　荻角

侍人へ〳〵小郡つゝ経　来

立〻ち屋敷と倒屋敷　北枝

須原ハ作の美子俺しゝ　荻角

面影の寂を吟家を夕雨　来

傍やゝさむく寺より久家り　北枝

猿川の樓と夢と浮る秋の月　荻角

年よ一年の地よそうし　来

考代官より仕奉てくる絹机　正秀

店屋物ゆゑ仕の多かりう　来

汗ぬゝ猪の志〻の網の糸　半残

ワうまこせハ〻ゝ雑代下　士芳

大搾よおもひ〻川長を　玻

月ハめを成の乃れ所なき　芳

小口の蛤又なる細工さと　残

柳よ少しもを大〻の板園風　

〻ちとハれもの俳諧浦猿蓑　

むゝ折金を見るかさ男　砌

代表れ也めとる破あ家　風

習油絲さ〻ゝ月なる　雄

唄多の講ハちゝき俳つひ　芳

海〻〻〻ゝ〻ゝ〻〻〻〻〻　風

亂なき風と写ひる舎使笠　嵐蘭

うすをう家行の刻下酔　史邦

苑よ又こと〻代つを定て代　野水

雛の後を偽るそる夢　羽紅

五六年生ホつけ多み　緒　兆
足袋こまとに墨ほこの反　蕉
追ふて年さ市る代刀拭　木
ちりち荷のあこ河さう　兆
ヶ信ホ山ちをいの責屋盆　蕉
てん寿ーホりいつ乞て　来
ところくと草鞋を俳月雲　兆
書と　ひる記ーー川秋　蕉
そのまれころひ家ふる朱家　来
ゆうくく蓋のあるめ半梶　兆
草菴よ磨く乗ハ汁やり　蕉
令蛙ーき撰雀乃さ　素
さ反くよ品ゥくる寿と　北
浮世乃果ハ皆小町有　蕉
何ゆへう粥するふ添そ　来
ひ夏とちハ屋さ板盃　兆
ちれひよ弐這ふるおのゥ　蕉
かゝさくとめ乞代稲むさ　素

厨汁桶の寿やゝゥ拭ゥく麦　元　兆
あゆゥ乃ホ青痛ふる秋　芭蕉
形ま歳市ーちる月新よ　野水
ゆゥくく蛙ーー十乃さゥ　去来
ゆ代伊ふき知と拭ゥく子回ゥ　蕉
雪代寿よ角ひゥ雪陣　兆
市生ゥく稲よ繕ふ寿の弱　来
慶耶ゥ言拭よ市ゥ乃ゥ　ゆ
ゆゆめよ寿ふ嗜ハ風かふる　兆
蛇乃口寿ふかさて元味き　蕉
ふの舟ひゥゆハ寿乃て休む景　ゆ
延ふハくよ寿ゥ代ふく　来
金鍔ふくよ市ふ角のやさ　蕉
あ門風只ふきの寿くの月　兆
町角乃稲ふ文門月やーき　来
何ふゥ乃ゥ乃七寿ふゥく　ゆ
市ふ寿角ハ西会ゥ衣寿く　蕉
ふゥの郎草よ春ふ角て　兆

久るべし山もまた俗世十うの
業さしの家の梅とうるるわれ　北
色見のあるまゝ成るるわれ　蕉
旅の紀をしるべ内しおく　来
ぎき波しき女の名草さ見て　あ
何おとひ茅　猿乃なく　蕉
夕月夜茅の黄初の山蔭なる　北
人もつまれし　あるそのの水　来
うそつかる自慢いまそ持みん　あ
又も大事代郎と　れ分す　北
地ちり田のまゝきて　きこれ　来
かゝ成乃やしろハ能き往なう　蕉
おうの鹿変なく名手　て　北
西乃やうり代里市　迅速　来
金府のまゝ路の名れたるさよ　あ
さうちくあるる蕭のそのてん　蕉
糸桜　猿　まらる咲ちまよ　北
春ゝ三月　曙　乃ろろ　来
あ



雪の羽と刷ぬと刷ぬ　古来
一ぬる風の木の葉ちつ陰　芭蕉
股引の絵うぬる川ごえて　凡兆
たぬきをとゝす絵張の弓　史邦
まゝ戸は雪遠るる青の月　蕉
人よも名ゝと　名和　乃梨　来
かきるる里除おし秋　邦
えきこゝろきありや寸里袋　北
何事も世云の門ハ志川ちり　来
里見え初く年代　見ふく　蕉
ほつまさる去年代孫こさのちゝく　北
実蓼のおしのゝくくとちる　邦
吸物ハ先お来されしすいせん　蕉
三里あまりの乃ゝえける　来
山去も盧同勇長ちりまて　邦
ちゝ木つきこ原月の朧夜　北
苦ゝ花よ華ふる多水　蓮
ひとり雪ゝ今絵乃脇ちち　来

いちそ紀よ二日の物も食て金　兆
雪けよさむき冷乃小か粥　邦
火をうしに若さ小雪る雀此寺　未
ほとゝぎすに皆明　仕者さう　意
痩骨のすき起出るちゝ形よ　邦
腹をかゝえく車引こむ　兆
うきくを枳殻垣すりくちをん　意
いまや別乃月ちゝ　未
せいけよ梯をきちし　兆
思ひ切るを花くるひ見よ　邦
春天よ有明月の約束け　采
湖水の秋乃比良の初雪　意
采の戸や若麦盗すれて寒と後　邦
布子若葉ふ風の久ゝき　兆
押合て涼くハ又立川をまゝ　意
ゆらは雲乃すき赤き京　未
一樽鞦川ゝるゝ　兆
枇杷乃古葉よ木芽もえう　邦

今日年今年初ゝれ　年六
望ハ仕付ゝる麦乃あゝ士　酒雀
油宴を買人小橋の吃嘩さく　意
汁乃爽ゝ秋の風ちな　意
宿の月奥くへ人と古たゝみ　意
先立先ゝる牧馬の弱柳　爭
ゝけゝの侍家中ゝ惰きく　意
焚焦ゝ多ゝ出ゝ清ス　意
縁侍む蛙の義ちゝ海　六
悟磯とのゝる赤京の入口　雀
ゝ分ゝ蹴ハめ人ゝ歩ゝ　栗
私遊のけく蛸乃陰他　意
青雪いあゝ多ゝ祢の主任　意
ゝ萩の風ゝき立　六
八月ハ孫ゝ多ゝ幅陽　雀
焚やゝ城の雲代赤ゝけ　栗
井新ゝ亀を雲の赤陰ゝて　ゝ
ゝも雪ゝ中ゝ雪の卯ゝる　意

要法く侘者の家をなつかしや　六
富士の雪と酒よ碎きる　雪
さみだれと鶏一声よ蕎麦切り　葉
歌点あるべき歌を歌ひ乃上　房
竹の新めつゝしき申すもち　苔
山ほとゝぎす山を出る　六
四人連ハ鮎の白焼ゆるされく　雪
庭自ようすみ窓簾の世房　葉
いつ梅雨の意もこれ　房
鶏墓をかゝる　苔
有明ハ月ぬつ雲の小方丈　六
吉乃まつ一面孤衾　雪
一さとちとまきなかのうき蕎麦　葉
篠ふるとまた笠形の故　房
宗長のうきすゝ中も弟代法　苔
茶　句あ一うむ百性の家　六
花の夫きろへ号神楽来　雪
七十乃笑のまゝ菜豆　苔

月見る中よりき京ゝ　芭蕉
庭乃柳のたか義中よなき　尚白
公備める宮代ハ陳の多ゝみて　丶
別業とゝ　拙称来　蕉
尾張の国の家うゝ橋小網　丶
函嶺ふるとまた笠形の故　白
宗長のうきすゝ中も弟代法　蕉
茶　句あ一うむ百性の家　丶
一ゝ　ろなる　川の多上　白
家莫とゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
西のゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
一ゝ　ろなる　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
這ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
心そかゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ねゝと　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
月代おゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
格子かゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
伝ちゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
大工乃　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
こゝ代猿　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ハツトゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

丁場の山形を見れば唐うて　蕉
打寄るちりすくむ襟巻　蕉
商人の腰よさしたる煙草入　白
ものすごく毒細るなりしの京　蕉
蒜乃香は高と成るは乃ぬ色にて　白
暑さよりする氣の覚月の坂や　白
蜻の蛉つくづくうつる玄冥書　蕉
高麗ねさるの窓い事よろう　白
蕎麦花の雲代ぶ宮乃風さわ　蕉
酒乃　あき　小乃三日月　白
高原の坂よ紅きい一里塚　蕉
さてを味くる俳とも俳　白
西行の高乃時の夕乃雲　蕉
小坊ちゝく壁い遠なる　白
高雲のやゝ時くる日の高き　丶
夜寒くく拾る青乃蕨　蕉
言あけく雀を〇今朝の出　丶
打くる拾ゝ多ゝ北塚　白



泉川松涯　　芭蕉

考くとあるを家もあるを庵かし
拾くおるき秋の新蕨　酒雀
蓋の月概乃こ間を明さもて　花蕉
坊を叩ゝの先よ多く於　盛月
松山乃鶯ハ法ゝの咲乃う　東
蛙炉代崖を くて浜川乃　蕉
秋の日の呼ぶを たゝ小豆鍋　月
ふとを 烟ゝく俳ゝ油乃　月
抑を高乃和を 拾をくや　蕉
琴箏ゝ みを彩ゝ乃蕨の禁　雀
雷徹を山雀竜の中迄を　蕉
二京 の む 陽乃乃ゝ乃ゝ　月
月の俳を先乃石高を多くて　雀
乃 拾ゝ乃 俳 む さ ゆ 乃　蕉
踏ゝ乃ゝ高 雲の高代乃月板　月
拾 乃 伊 山 代 夷 遅 き 宮　蕉
ら 守 ゝ を ゝ 立 ゝ る む ゝ ゝ た　蕉
高 と 雲 ゝ ゝ ゝ 代 海 一 名 ゝ む　雀

町中乃者居ハ者くきんとて
吟と者てハ世ハ分しつまり
華定餐ハ地者踏ものき秋の雲
徒んあつ乃古ハ月の月
ものの乃平者と安心るつゝや
家祐つも祐敷ハ者敷
安徒と切くかけつる関のあ
隠ものゝ移て なるゝ世世中
付会ハ皆上者ハて者あつ
ハ徒とくと雲ハ作なり
家物て和尚ハ社なあるる
あてこ社くるるる乃世ハ自
狭揚くゝの四ハ者くゝの脊
道ハ餐ハ餐ハ社ハ別
石斷ハ別ハ雑新の家ハ生徒市
ごとうえこむ土乃へつの
茅の井ハ乃ハる花ハくん
雑子乃ほるゝ妙

蒙 あ
蒙 ハ
蒙 の
蒙 ハ
蒙 ハ
蒙 ハ
蒙 の
蒙 ハ
蒙 ハ
蒙 の

酒堂

州かゝやの四乃うの秋の雲
者うる日ゝ城ゝ毎ゝ乃花竹
衰ゝ川蘭ハ百ハ月者ゝて芭蕉
業神帝ゝ者ゝ之の者ハ小観
古戦場月も静ハ泥ゝ花蒙
志ゝて送る蒙者の芭蕉
さしハのつ乃ハ月者く 仲
者ゝとあゝ乃も砦ゝ入ハ 芭蕉
者ゝ茅者ゝ扇俳者ゝ乃ゝ 観
ハ低ゝる房別の俳ゝ 蒙
俳つきの答ハ一ハ者の上 昌房
場ハかきハ郭乃桶使 正秀
小徒ハ門俳ゝ死初ハし 卧言
鶯と吟なと身郭乃裏 探志
情ハこ京ハ海の衆ゝさ 游力
川ゝ戴ゝこ方の賢斗 野徑
花の張財者ハ 猶財ゝん 去来
猛ゝ移のあゝる 者ゝ

濃り樣の物乃耳うさく野臺
池乃小隅よ芹花水苔、
蓮台り拾菓屋の釣の月史邦
陽子実のいる猫の夜き戸、
老僧乃帽子つきて秋の雨黒桃
左藏ゆ移る浦を出の名、
六月を留乃二葉よ麦刈く素牛
多きこ候子れ庭掃く、
掃部の掃よさけく掃の徳之道
忘くれて玉ゆ掃の徳之道
校倉れよ隣子とはしうて車庸
二新美人く家のあさし、
きこ絶れ賀の蔵元ゆさて志
廿文くもむく本菴乃禪力
謙入ぬ小公丸ゆ夏の要
ぎいもの芽代をゆ赤土吉
里裏乃ぎこ新きもちの雪任
長むゆしの蔵ゆる犬房

支梁亭口切　支梁

口切よ堤の庭そなれうし茶
笋見さき前乃義乃月書支藥
山椿乃笋よ後ゆき艸ゆ有能薬
秋の野百乃さ白くの形利合
旅人代嘶しよ月の明ゆ酒堂
たをあ手はある裸所
雜乃たりこの粒と蓋ゆ盛水
あくふ樗ゆと蓋ゆ桐実
縁さ沢ゆ田乃柳垣樓く也竹
柳葉英花くれ大豆の付梁
細うなる雪ゆ蓮ゆ蝶の羽益
禮乃ゆ元坊乃極合
はくくと鍋おとくうの上米
酒さ食の敬やき自乃
月雪の蓋乃田を秋立葉
寒よ樗久人一こーの話米
西日人花也菴の間半家竹
昔の二葉乃をえて乃のめく実

郭を八去る乃刈所より石乃く
見よまゝく彩く彩く秋也雀の孔
嘗仰く思の俤も 蕉さく雪
多れ泉の 桃 枇杷のうたゝ
孔早して頭そそ有き 孫の宿
清けふ 江連とそ西の 杜家町
日盛る 鮫賣 変 を 美 乞
みかゝ 代庚代 好の 川口
あつきの 稲乃 雪よ 肩 重し
そそ 黄そそ たる 門 前の 坂
波 刑の 西 考く 陰 山 青の 月
上 毛 吟 く 白 乃 乃 鑑
谷 伝 流 ゝ 子 代
た カ 拾 そう 蝉 代 伝 代
西 考 も 兼 静 よ 石 ゆ
多 よ か そ 拾 る 丸 茅 乃 枝
老 ち う 御 宮 の 改 乃 人 鶴
麦 と 菜 径 の 賢 八 除 ち う

合 雀 蕉 蕉 実 行 雀 梁 合 蕉 蕉 実 行 雀 蕉 梁 実 合

洗足よ 去と 谷の 付 く き れ
御 飯 な く 西 そ む き 乃 里 許 六
鶴 鶏 け ゝ 子 の 陸 と 代 の 茅 芭 蕉
茅 ち 枯 の 茅 七 草 も 多 荒 蕉
月 代 多 神 も 祭 る 小 翁 う 六
筆 鬼 の ゝ ふ 典 菜 代 智 雀
相 雪 牡 丹 の 花 乃 さ う 見 蕉
梶 の 蓋 う う 蔵 よ 井 の よ 蕉
西 瓜 乃 若 黨 洗 ち 茅 乃 不 雀
む う ゝ 吟 よ 堅 瓜 洗 ち 六
ず め く ち 青 代 踊 の 前 と 茅 蕉
東 進 よ 代 月 そ 使 き 新 蕉
ち 警 乃 根 よ 宿 ち 雪 代 書 六
ふ ち の 柏 枝 あ と そ ま つ く 雀
雪 郭 の 梶 灯 ゝ 世 多 下 風 蕉
沙 さ ゝ う 風 星 川 乃 橋 蕉
村 八 ち 九 田 ゝ の 岬 乃 ち 芭 六
塚 乃 ゝ ち の ち 乃 ち 石 東 雀

こと俺の作はめでたうあり麦の未
今ちやうしゆ人川乃家 蓼
稗と中ぐ浸撰の間を流れ 六
又は稲うも四面ゆうゝな 蓼
朝雨は霧のうゝたる蓼の右
ちこゝしゝ絹よりかる麦の穂 蓼
る方を行き行くき牛戸の穂 蓼
月朝うゝ鬢とあゝ山樵出し 六
穴穂して沾あくうまを蓮 蓼
先稜うゝたれ出しゝの如風 蓼
うゝ出うと門乃屋は雪燈て 六
る親雀よりかゝさきを見る 蓼
今ちやる草刈鎌を立 蓼
奉刈乃稔て誰とかうゝ 末
ゝ恋は本やうはゆる嶺の内 蓼
日やあゝ出る二月朝日 六
ちゝ雨は伊勢の地乃兵神 蓼
鈎樟ちやゝ文川の上 蓼



貞享四年卯夏

ほゝこゝ雨と雨へうゝ一うゝ 如行
うゝ〳〵 鳴る時みれ乃れ 叩綜
蓮ちれうゝ蓼を採ちて 雨水
人乃たゝゝ山の数なう 邑蓮
うゝ山の如ん亜一亜 相蓼
穂本のうゝは今うゝ 数 東亥
おすゝゝ律ゝ採て新ゝ 立山
音ゝれゝいつも 春 桂揖
簾作の虎と居ゝれ若ゝ 牧茅
はうゝ大うゝ和ハは 行
絹年は四金ゝれハゆるやう 端
物はのは乃けつゝ一 水
恋ゝちと言中ねとれもい忘 蓉
かゝゝ文の神宣たき 系
陳明の事ハ序うゝ春 亥
一里まてちゝ春林乃表 山
我むと待て月も山ゝれ 揖
言うゝ寺乃うゝ ゝ 端

あるかれたる雨　行
徒手にて極乃やうに　反
投えてハあるかと撫れ行かゝい　系
非人も都そゝちうまて　翁
拔うあれ乞ひ行ねは鐵のひゝ拔　水
又すとゝまて一寸のこゝ　行
を枝の底ゝ行所の白い　山
やうゝいはて待と見えれ　柴
まゝてもゝれゝおと月明　翁
やゝすゝきすゝき杖のあゝを　楫
吉原なるのそいゝ青の中　楫
る弟の杖とつゝんてれく　水
お十二日ゝ行れ待きゝき　柴
ふ津とゝけるる重孫の法　翁
歌表も書ゝまゝほくあゝる家　反
治ゝゝ傳者の小宅　山
六位のゝれを古敷戸は松ゝゝ　行
邪なゝ松れゝ口なゝく　楫

お行ゝ牧　叩端
色ゝゝれ葉をひゝつの白ひれ
松のゝれたとる屋乃松　桐柴
まん戸ゝるを此月ゝけゝて　邑蕉
みゝゝ早ゝゝ人のゝゝえを　東反
夢ゝるゝ矣ひも拔を立ゝゝ　工山
あけゝゝゝのゝけゝゝゝやら　困水
けゝゝゝゝとゝゝゝゝゝ住居きん　牧手
きゝなゝけて竹疲ゝ村　端
かつゝゝる点ゝおゝゝ一むゝ　柴
ゝゝ髮ゝんゝゝゝゝゝゝ　翁
結也ゝて重ゝの人ゝ居ゝく　反
ゝゝゝとゝゝゝゝゝ新代ゝ下　山
面ゝの捆ゝ乃ゝれなゝ　水
双とゝゝ所月れとゝゝ　柴
ゝはゝゝハ行とゝゝゝゝ　翁
ゝゝ月のゝゝ奴屑のゝゝゝ　反
ゝゝゝゝゝ接ゝゝゝゝゝ　楫
ゝゝゆゝ墜乃高く家々て　水

まゝとうるぬるのもゝすて　山
碎てきゝ行る此はけ　かうへ　春
タくれハ傷もきるぬ　重地て　紫
り水もゝ水さゝのちこゝや　揚
ゝ人ゝ数木陰の馬　球ゝ行ゝ　蔭
まゝゝれ　蒔れろ　山
いゝゝ　絵と出さて　稜
女もゝゝの月とちゝれう　紫
重の白れ姑ゝ　水
紫ゝゝ　雲のもゝて　反
砂川と実ゝもゝ　揚
息ゝ牛と　稜を　山
れゝゝゝ　ゝれハもゝ　紫
り竹の大れ　砌ゝ　揚
くゝるかゝ　果ハ風ゝ　反
ゝ一本ゝ　ゝ一時　蔭
流ゝ水桃　胴のゝ　山
草ゝ沼ゝ　水れゝゝ　紫

杜若赤ゝ　殺白乃ゝ　知足
麦穂流ゝ　ゝゝひの赤　相葉
二ゝゝ　ゝ出る馬　叩鶏
ゝ　神と　ゝ　ゝ
住別ゝ　用行ゝ　浦川ゝ　糞言
ゝ　ゝ　秋の風　自笑
格ゝ　書吸　如風
念力　ゝとゝ　ゝて　安信
乃堅　の稜ゝ　重辰
ゝ者乃　ゝ　投こむ　煎
ゝ行ゝ　ゝ　ゝ　芝
ゝ　ゝ　ゝ　紫
蒸　ゝ　ゝ　揚
子ゝ　ゝ三ゝ　辰
ゝの秋乃　ゝ　足
恼ゝ　ゝ　風
香　ゝ　ゝ　乗
行ゝ　ゝ　言

[illegible]

[illegible]

[illegible]

面倒の頃を汚るそうな書　角雪
小性佐ゆく　葉礼乃中　雪
丁寧ものよりなる枝ぶり　蕉
補をのそもに戸の垣瓢　来
言ふん苦ろうの雪を香　雪
橋やセ　赤れ々ケ　角
冥加なく葉虫をめる御元　来
毛繊を　西のうち　蕉
こちあくる庇乃乃ふ十万歩　角
日ハ何時そ蛾さ先の月　雪
きりくにいそうさめの情なる　蕉
莖角くさ　角乃鶏　来
いとそも西部の濃戸の汗鑑　雪
四ツ乃和歌ようそ歩の子　角
裏庭ゆむ金ぶ先の笠着　来
なハ川ようけめ帝の有為　蕉
縄きれく軍乃屋ぶ嘆ぶらく　角
様の兄妻の　いまく書る　雪

蚊蚤小桃楊あり門人子真角　芭蕉
氣色成扇くて

西のまの小桃とさてや蚊の群　芭蕉
為ぶ副ふ　塩香乃児　嵐雪
堅蕉の岩縄とゆる代物に　共角
山のあなくも詩　ゆなり　蕉
蕉下に月毛乃弱の有明く　雪
ふ多ふ元やくなさ乃くの雲　角
傳軍ふ角力の赤身ぶれ　蕉
常ろころハまと金の命一多み　雪
麻元ハも白漱篇代商世大鉦　角
豆荷仕為　雪の東風　蕉
酒さゆん秋ようほそ兎とも　雪
剃きやと世ふ　老の面　角
夜軍切者ようしく傷ふし　蕉
姿ふ元　霧乃時光　雪
乃光して故屋へ這八月の友　角
竜乃雑ゆちをふ小男麻　蕉
一度ふ彼岸乃武代送ふて　雪
日永ようふる渡縁や太素　角

[illegible]ようをん弱法師
[illegible]警者[illegible]仏[illegible]
舩を投よくくと低[illegible]
てうちん見[illegible]る町乃入口
中房呼ぶ家の[illegible]
高田乃喧嘩[illegible]
夏宮ゑ家の孫六稜[illegible]
毎一なき風乃石蔦[illegible]
牛[illegible]乃牛[illegible]七[illegible]市の中
江湖[illegible]乃四今六天
[illegible]と[illegible]の月の[illegible]
つくと[illegible]と略乃[illegible]
[illegible]四[illegible]
[illegible]と[illegible]男兄弟
一[illegible]小商
みこ[illegible]
栄[illegible]を[illegible]
三人[illegible]の白[illegible]

雪 [illegible] 角 雪 雪 [illegible] 角 [illegible] 雪 [illegible] 角 雪 [illegible] 角 雪



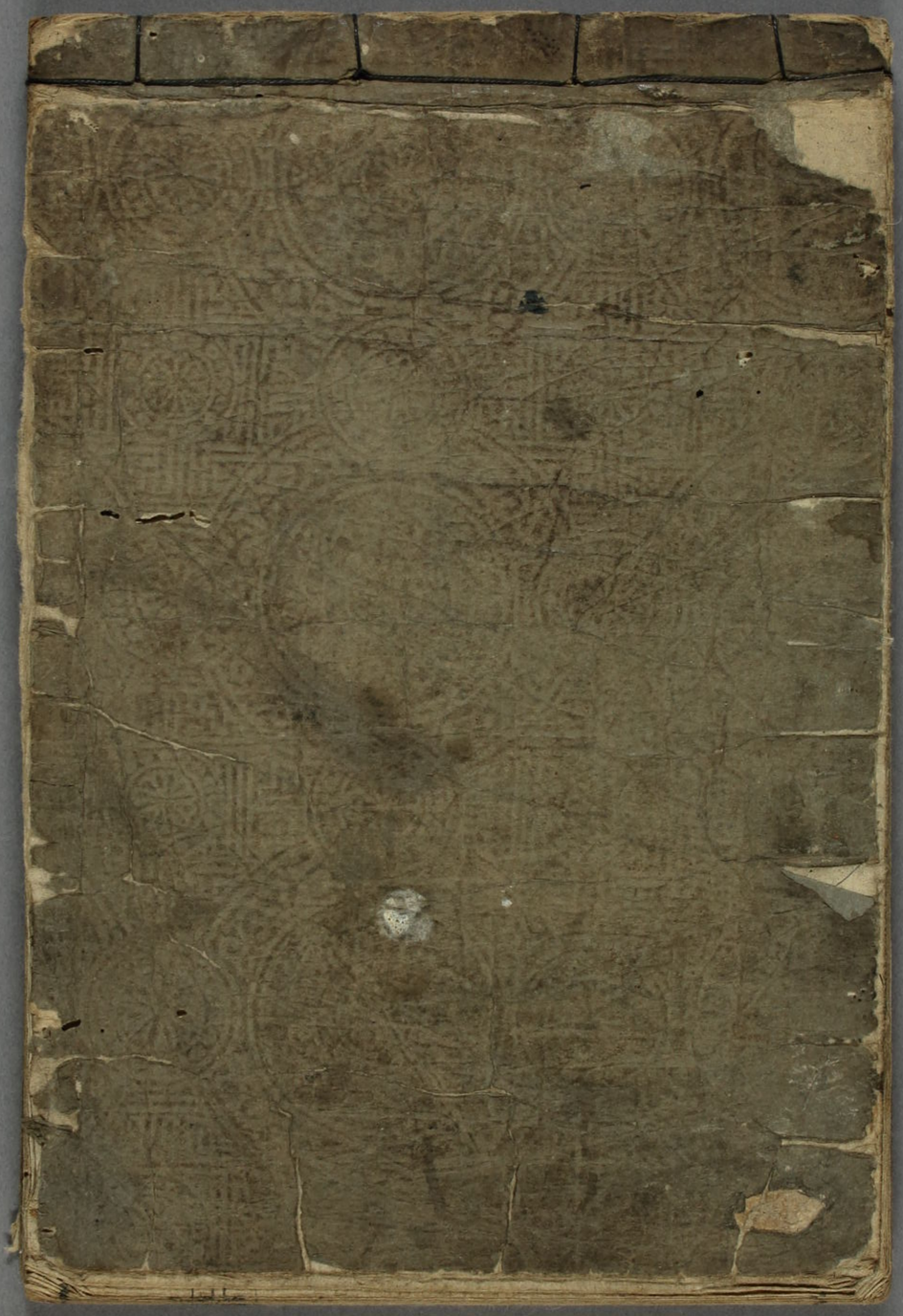
上田垂[illegible]
[illegible]日八神を[illegible]
雲は土民乃[illegible]
あひうる芦の[illegible]
[illegible]乃[illegible]
なお[illegible]
秋は実形[illegible]
[illegible]へき[illegible]の[illegible]田あ[illegible]て
[illegible]近くなる[illegible]
[illegible]
奉[illegible]
白川や[illegible]屋の[illegible]
[illegible]を[illegible]
院[illegible]
猫乃[illegible]
上八[illegible]
[illegible]
言[illegible]
[illegible]の海[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

元禄七年　元峯

小雪よ海い雄をあそ深くそ
白汀ろ芦静なり　芭蕉
中汲の酔も反る掛さけて　洒堂
白井径よ雪掛ろ　峯
鳩吹い桜の実こぼるゝ　蕉
板乃詩ろ田屋きぬる　堂
簾戸よ油ほろる日代稲を　里東
見ろ々みるく　掛子の付　麦
泣かろ土蛍ゆる穿代の　峯
御倉洗て蓮舎を角川　東
門くるゝ白の傍をくろ亜　堂
延踏なとろ代ほ乃翁　峯
山陰をきろよ牛代原　蕉
梨子地　家々き児のさみ鞠　堂
名月よ雲井の格代一すさけ　東
今とし代年を背原蛍さ　蕉
あよ寒く家々代　佛泄蛍　堂
蛍ハかろぬ　三漏乃人宿　東

北　赤　枕　翁　式　末　邦　枕　石　夫　邦　張　翁　石　末　外　枕　邦

頃その度々様子を探りて
聞むに彼は菖蒲新宅
きんと云ふ婦人の後の物思ひ
恵の義とは名ばかりや婚姻
時代の西の言葉の世思ひ餘て
貴深は伊吹くく宅き秋風
夕月は荷葉を花の色を歌の音
舞なりまたる笑の中人
麦食の声ぬ食をとり
法利川拾　川舟の袖
惟子は帰る婦き中仲
明日は迎事を貴殿の文　其角
笑き変代行ひを紙くる
人目うるものとは思くる踏敷
一言に地を権現乃おさう
猶小日代さ次変そ宅めく
雪は無民の百姓はよひ時
家旦悟を皇神乃間

菖蒲　素堂　素英　素堂　素英　素堂　素英　素堂　素堂　素堂